

第3回IF学生成果発表会

2011. 9. 14

医学部1号館第2セミナー室

Molecular and Cellular Basis of Disease Condition and Experimental Therapeutics (疾患のメカニズムの解明と新規治療法の開発) グループ

開会の挨拶

貫和 敏博 教授 (呼吸器病態学分野)



私が研究の大変さ、面白さを知ったのはむしろ米国でのことでした。一生懸命自分で仕事をして行っても、それをアウトプットするためには reviewer というハードルを clear しないとイケないわけです。ですから、論文を書くということは reviewer とのやり取りという一面があります。ここはこう要求されるだろうということを予想しながら、論文を書いていかないとならないわけです。本日の先生方の発表は、そういう complicated business への第一歩であると思います。私が研究室の学生によく言っているのは、大学院生として、一つの仕事をまとめる訓練、output の方法論を理解すればそれでいいということです。人生にはいろいろなところでチャンスが来ます。そのどこかで自分が持っている力を、ここは面白いということを発表出来る力を持つてほしいのだと思います。

研究とはそういう意味では、研究費獲得から発表まで、一種のコミュニケーション術が必要な complicated business です。こういうプレゼンテーションを通して、聴衆とのコミュニケーションの訓練をする。これも米国ではかなりの訓練をします。学会での発表には、必ず予行があって、そこで「You win とか You lose」(win the audience) と言われます。聴衆が内容を理解するか、面白いと思ってくれるか。日本ではまだまだそういう訓練が足りないように思います。本日、先生方がなさる研究発表は、聴衆との間のコミュニケーション、そういうつもりで、自分の仕事のおもしろさを伝える、聴衆が付いて来るような工夫をする必要があります。こうした意味で、本日の Interdisciplinary Force 発表会というのは大学院生に有意義なものだと思います。

発表

森谷 邦彦 (免疫学分野)

「A new model of MLL fusion oncogene-related leukemia using humanized mice」

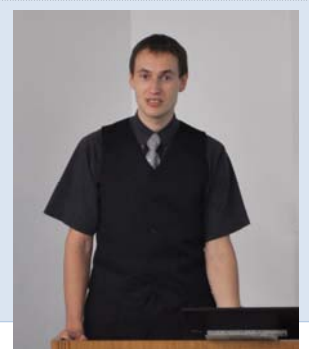
「疾患のメカニズムの解明と新規治療法の開発」という題材であり、比較的他のグループよりは基礎データをもとにヒト疾患に応用できるかについて報告する演題が多く、大変興味深い内容でした。発表した方々の発表内容はバラエティに富んでいましたが、何がおもしろいのか、なぜその研究をするのか、それを証明するにはどうしたらよいかなど実験の方法論は共通する所があり、さらに異分野の人にそれをわかってもらうためのプレゼンテーションの仕方は聞いていて勉強になりましたし、刺激を受けました。今後の研究を発展させるために大変有意義な時間であり、このような機会を与えていただきありがとうございました。



Cezary Jan Treda (呼吸器病態学分野)

「The Role Of Secretory Leukocyte Protease Inhibitor In Lung Cancer Formation And Progression」

It was a great pleasure and honor to participate in Interdisciplinary Force (IF) meeting and be able to present my research to other professors and other students. I was challenged to summarize my research and then discuss over it with the others. After my presentation, I was asked several questions, what gave me an impression of a high interest that my presentation induced. I was also extremely glad to receive some precise comments on the presented topic, what after coming back to laboratory, challenged me to develop some points I



described during my presentation. Furthermore, besides my presentation, I was glad to hear 6 other speakers and broaden my knowledge on the new mouse model to study leukemia or dFdC resistance in pancreatic cancer among others. It is always a great opportunity to learn about other doctors work, since at the moment of listening to them, you ask yourself, whether you used already all the possibilities to prove that your hypothesis is true or not, as well as, in future, it can open more possibilities for fruitful cooperation. Thank you very much for this opportunity.

吉松 軍平 (消化器外科学分野)

「Efficacy of transplantation with co-encapsulated islets and mesenchymal stem cells」



今回、「疾患のメカニズムの解明と新規治療法の開発」ということで、他疾患に対する様々な切り口でのトランスレーショナルリサーチの内容を聞くことができ大変勉強になりました。私は「カプセル化膵島における間葉系幹細胞の効果」について発表させていただきました。まだ研究を始めて間もない段階でしたが、異分野の方達が集まる中、わかりやすく聞いていただけると心がけながらまとめ上げることで、自分自身の研究テーマに対する理解がより深まったように思います。また研究内容についてフロアの先生方から大変貴重な意見を聞くことができましたので、今後の研究に参考にさせていただこうと思っています。今回ご指導いただいた先生方、また IF 発表会を運営・サポートしていただいた方々に感謝申し上げます。

白井 剛志 (血液免疫病学分野)

「Retroviral Vector System Identified FLRT2 As a Novel Cell Surface Autoantigen Against Anti-Endothelial Cell Antibodies in SLE」



発表会では私を含め計7名による発表があった。他分野で頑張っている大学院生の研究発表を聞く機会は年に数回であり、内容について行くのがやっとで不勉強さを実感しつつも、非常に刺激的で興味深い時間であった。20分という発表時間は通常の学会発表に比べると長い、時間配分や構成を考える良い機会になるとともに、より詳しい背景や結果を含めた発表内容の理解には必要な時間であると感じた。振り返ると、特に今回はテーマが発表内容を良く反映しており、絶妙なテーマの設定とグループ分けであった。3時間という長丁場であったが、座長をしていただいた森口先生をはじめ、参加頂いた貫和教授、海野教授、張替教授に厚くお礼を申し上げたい。

中嶋 壮太 (循環器内科学分野)

「Evidence for the Important Role of the Bone Marrow in Modulating Microvascular Endothelial Responses and Metabolic Functions in Mice」



私の所属する循環器内科学からは私のみの参加であり、そういった構成の参加者の中で発表すること、質疑応答にこたえるということは、自分と同分野の人間が基本集まる普段の学会発表とは異なり、発表内容に対する配慮や、新たな視点を学ぶことができたという意味で、今回の発表会に参加し非常に有意義な時間を過ごすことができました。特に質疑応答では、今まで参加発表した循環器系の学会ではあまり聞かれない点、しかしながら自分としてもどうなんだろうと疑問や興味を持っていた点を、その分野に通じた先生方に鋭く指摘していただいたことは、非常に感謝しております。今回の発表を通じて学んだことを、今後の研究に生かしていきたいと思えます。どうもありがとうございました。

大峰 健 (薬学・薬物送達学分野)

「Quantitative Proteomic and Metabolomic Approach to Clarify Determinant Protein for Gemcitabine Resistance in Pancreatic Cancer」

今回、初めて IF 発表会に参加させて頂きました。日頃、なかなかお聴きする機会

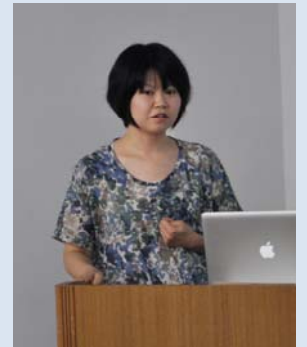
が少ない医学系の、特に同世代の方々の研究成果とそれに対する考え方を拝聴する事ができ、大変参考になりました。また、自身の研究は臨床応用を目指した研究であるにもかかわらず、薬学研究科にいる限りでは、実際に現場で医療に携わっておられる医学部の方々のご意見をj得る機会がまだまだ不足していると感じています。学会等とは違い、より本音での議論を交わす事が出来るこのような機会は大変貴重であると感じました。今回、発表を行ない、医学部の先生方から幾つものご意見を頂き、自分では重要視していなかった課題と自分の認識と一致する問題点とが整理され、今後、本研究をさらに発展させるための重要な道標となりました。



相野谷 慶子 (医化学分野)

「UG4-directed GATA2 Expression Is Essential for Proper Development of the Vesicoureteral Junction」

私は今回 I F 学生発表会において、今まで大学院生として研究をすすめてきた尿路の発生と転写因子 GATA2 との関連性について発表いたしました。大学内の他研究室の方に対して発表する機会が初めてであり、自分の研究内容をうまく伝えられるか不安を感じながらの発表でした。しかし様々な角度からの質問、ご指摘を頂き、今後研究内容をまとめていく上で、非常に参考になりました。またいただいた御指摘により、自分が現在のテーマについて研究するに至った経緯について、明確に示す重用性を認識いたしました。また他研究室の大学院生の発表をきくことができ、とても刺激を受けました。このように今回の I F 学生発表会は、私にとって非常に有意義な機会となりました。



閉会の挨拶

海野 倫明 教授 (消化器外科学分野)



本日の IF 発表会のタイトルが、「疾患のメカニズムの解明と新規治療法の開発」ということで、皆さん、臨床に則した良い研究をされておられるというのが私の印象です。プレゼンテーションを私のような門外漢でも理解出来ましたので、皆さん「You win」 だと思います。今後皆さんは、学会などでのプレゼンテーションや、論文を投稿すると思いますけれども、聴衆や論文の審査員 は人ですので、皆さんの研究のモチベーション、動機を十分に表した方が聴衆の心に響きますし、審査員も納得するんですね。論文でも発表でも、何故この研究をやろうと思ったのかをきちんと表現すること、それから如何に自分が情熱的にこの研究をやったのか、ということ表現することが重要で、そういうところを今後、皆さん気をつけて頂ければ良いのではないかと思います。今日はご苦労様でした。

張替 秀郎 教授 (血液・免疫病学分野)

今日はご苦労様でした。高いレベルの発表ばかりで、非常に心強く思いました。皆、タイトルからもそうですけれども、臨床にフィードバックできるような研究ばかりだったという点も今後に非常に楽しみです。皆さん方の研究が今後も発展できるように願っております。



オーガナイザー・司会

森口 尚 先生 (医化学分野・講師)

進行しながらも発表者に質問を畳みかける、研究心溢れた司会をして下さいました。オーディエンスこそ少なかったですが、

森口先生の鋭い質問に発表者も大いに勉強になったことでしょう。大変お疲れ様でした。

